

## 着脱動詞の対照研究

### 日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較

當野能之\*・呂仁梅\*\*

キーワード: 着脱動詞, 一次的衣類・二次的衣類, 動詞枠付け言語, 衛星枠付け言語

#### 要旨

本稿は日本語教育においても問題となる, 着脱の動詞に関する類型論的対照研究である. 本稿では日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語を対象とし, 以下の2つの問題を取り上げる.

- (1) 日本語・中国語では衣類により異なった動詞が用いられるのに対し, マラーティー語・英語・スウェーデン語ではすべての衣類に関して同じ動詞が用いられる.
- (2) 日本語・マラーティー語では動詞のみが用いられるのに対し, 中国語・英語・スウェーデン語では, 動詞以外の要素(小辞 (particle) あるいはそれに相当するもの)が付随する.

以上のような, 言語間にみられる相違点と共通点は, 単なる偶然の一致ではなく, 次の表に纏められているように, 体系的なものであるということがわかった.

	動詞枠付け言語	衛星枠付け言語
一次的・二次的衣類の区別あり	日本語 (着点による語彙化)	中国語
一次的・二次的衣類の区別なし	マラーティー語	英語 スウェーデン語

- (A) 日本語と中国語では, 衣類を我々の生活にとって必要な「一次的衣類」と, 「二次的衣類」とに分け, それぞれにおいて動詞の使い分けをする. 日本語ではこのような区別に加えて, 一次的な衣類に使われる動詞において, 衣服をどの「身体部分」に着けるかで更なる区別を行っている. 一方, 英語・スウェーデン語・マラーティー語ではそのような区別に無関心である.
- (B) 移動の表現において提案されている「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という言語類型的区別が, 着脱の表現においても反映し, 動詞枠付け言語である日本語とマラー

\* TOHNO Takayuki: 神戸大学大学院文化科学研究科.

\*\* LU Renmei: 神戸大学大学院文化科学研究科.

ティー語は動詞のみを使用する(例えば「着る」)。一方、衛星枠付け言語である英語・スウェーデン語・中国語では動詞以外の要素が必要となる(例えば put on)。

## 1. はじめに

「着る」、「かぶる」、「履く」、「着ける」、「脱ぐ」、「はずす」等、日本語には衣服の着脱に関する動詞が豊富に存在する。一方英語に目を向けると、‘wear’, ‘put on’, ‘take off’ 等、着脱に関する動詞はそれほど多くはない。このことに関して、金田一(1988: 214)は、「これは日本人が衣類に異様な関心をもっているのを表しているかもしれない」と述べている。英語の一単語が日本語で多数の単語に対応することはよくあることである。例えば英語の‘rice’という単語が日本語で「いね」、「こめ」、「めし」、「ご飯」等、訳し分ける必要があることはよく知られている。このような例は、文化的な差が語彙化に反映した例であり、日本では米が主食で、英語圏ではそうではないことが、大きくかかわっていることは明らかであろう<sup>1</sup>。しかし、着脱の動詞が日本語に多いことが、金田一の言うように、文化的なものの反映によるのかどうかは、‘rice’の例のように簡単に決着がつくものではないと思われるので、本稿ではそのような問題には立ち入らない。それが文化的なものであるにせよ、そうでないにせよ、二言語間の単語の対応に大きなずれがある場合、学習に際して困難が生じる。実際、日本語における着脱の動詞は誤用の多い語彙であるという報告がある(彭飛(1990)等を参照)。着脱の動詞に関しては、すでに影山(1980)、McCawley(1978)等の優れた研究があるが、主に日本語と英語の比較にとどまっている。本稿では言語類型論の立場から、日本語、中国語、英語、スウェーデン語、マラーティー語<sup>2</sup>を取り上げ、比較・対照することで、言語間の類似点と相違点を明らかにし、表層上の類似点や相違点がどこからくるのか明らかにしたい。

## 2. 問題の所在

次の表1・2では、「シャツ」、「ズボン」、「帽子」、そして「時計」の4つの着衣を取り上げ、それぞれの言語がそれぞれの衣類を「着脱」する際にどのような動詞を用いるかを示してある。表より読み取ることのできる違いは主に以下の二点である。

<sup>1</sup> rice の例とちょうど逆のパターン、つまり日本語の一単語が英語で多くの単語に対応する例ももちろんある。日本語では「大麦、小麦、烏麦、裸麦」等、前部要素を変えることで麦の種類を表すのに対して、英語では‘barley’, ‘wheat’, ‘oats’, ‘rye’ とそれぞれ独立した語が存在する。これも文化的なものの反映であると考えられる。

<sup>2</sup> マラーティー語はインド・ヨーロッパ語族、インド・アーリア系言語に属し、インド西部のマハラシュトラ州の公用語である。基本語順は SOV。いわゆる能格言語であるが、能格型格表示と対格型格表示が並存する分裂格表示(split case marking)という現象を示す言語である。

表 1 着衣の動詞

	シャツ	ズボン	帽子	時計
日本語	着る	履く	かぶる	する・つける
中国語	穿上	穿上	戴上	戴上
マラーティー語	ghaalNe 'put.in'	ghaalNe	ghaalNe	ghaalNe
英語	put on	put on	put on	put on
スウェーデン語	sätta på 'put on'	sätta på	sätta på	sätta på

表 2 脱衣の動詞

	シャツ	ズボン	帽子	時計
日本語	脱ぐ	脱ぐ	脱ぐ・とる	とる・はずす
中国語	脱下	脱下	摘下	摘下
マラーティー語	kaaDhNe 'take.out'	kaaDhNe	kaaDhNe	kaaDhNe
英語	take off	take off	take off	take off
スウェーデン語	ta av 'take off'	ta av	ta av	ta av

(1) 日本語・中国語では衣類により異なった動詞が用いられるのに対し、マラーティー語・英語・スウェーデン語ではすべての衣類に関して同じ動詞が用いられている。

(2) 日本語・マラーティー語では動詞のみが用いられるのに対し、中国語・英語・スウェーデン語では、動詞以外の要素(小辞 (particle) あるいはそれに相当するもの——中国語(上 / 下), 英語 (on / off), スウェーデン語 (på / av)——)が付随する。

本稿では主に、以上の2点に論点を絞り、議論を進めていくことにする<sup>3</sup>。(1), (2)に見られ

<sup>3</sup> 本稿では「着る」と「着ている」というようなアスペクトの対立の問題は取り上げず、もっぱら前者のみを対象とする。これはアスペクト論全体の中で論じられるべきものであり、本稿の範囲を超えているからである。また、「自分が着る場合」と「他人に着せる場合」の違いに関しても、今回の考察では前者のみを対象とする。これは、他者に服を着せる場合には、いわゆる「直接使役」と「間接使役」の問題が関わることとなり、やはりこれも使役一般に関する議論の中で論じられるべき問題であると考えからである。但し、参考までにそれぞれの言語のデータを以下に載せておく。それぞれの言語の例文は①の日本語の例文に対応している。また、それぞれbが「直接使役」の例であり、cが「間接使役」の例である。使役一般に関しては Shibatani (1976), Shibatani & Pardeshi (2002) を参照のこと。

- ① a. 息子がシャツを着た。[日本語]  
 b. 母親が息子にシャツを着せた。  
 c. 母親が息子にシャツを着させた。
- ② a. 儿子 穿 上 了 衬衫。[中国語]  
 son put up PF shirt  
 b. 母亲 给 儿子 穿 上 了 衬衫。  
 mother to son put up PF shirt

る言語間の類似点と相違点は一見すると偶然のもののように見える。例えば、(1)では古典的類型論で言うところの膠着語である日本語と孤立語の中国語が同じ特徴を示している。一方、(2)に目を向けると、日本語はマラーティー語と類似していて、中国語は英語・スウェーデン語と同じ特徴を示している。もちろん、語族による系統的分類がこれらに適用できないことも明らかである。本稿では、(1)、(2)にみられるような言語間の差が偶然の一致ではなく、体系的なものであるということを解き明かしていく。

### 3. 動詞のヴァリエーション

まずは(1)で提起した動詞のヴァリエーションに関する問題から考えていきたい。以下では、始めに、着脱の動詞に関する意味構造を簡単に考えた上で、議論を進めていく。

#### 3-1. 着脱動詞の意味構造

ごく簡単に考えると、着脱動詞の意味構造は次のように仮定することができる。

(3)  $x$  causes  $y$  to move to  $z$ , where  $x = \text{agent}$ ,  $y = \text{clothes}$ ,  $z = \text{body (part)}$

上の意味構造は「動作主 (=  $x$ ) が衣服 (=  $y$ ) を体(あるいは体の一部分) (=  $z$ ) に移動させる」ということを概ね意味している。主語が主語自身に衣服を移動した場合(つまり主語が主語以外の誰かに服を着せるのではなく、自分で服を着る場合)は  $x = z$  ということになる。また、以上は「着る」「着せる」に対応する意味構造であったが、「脱ぐ」「脱がせる」に対応する意味構造は以下のように仮定できる。(3)との違いは体 (=  $z$ ) が着点ではなく、起点である点にある。

(4)  $x$  causes  $y$  to move from  $z$ , where  $x = \text{agent}$ ,  $y = \text{clothes}$ ,  $z = \text{body (part)}$

(着脱動詞の意味構造に関しては、さらに詳細な検討が加えられるべきであるが、それは本稿の

- c. 母親 让 儿子 穿 上 了 衬衫.  
mother made son put up PF shirt
- ③ a. mulaa-ne sharTa ghaat-l-aa [マラーティー語]  
boy-ERG shirt.M put-PF-M  
b. aai-ne mulaa-laa sharTa ghaat-l-aa  
mother-ERG boy-ACC shirt.M put-PF-M  
c. aai-ne mulaa-laa sharTa ghaal-aaylaa laaw-l-aa  
mother-ERG boy-ACC shirt-M put-PTCPL make-PF-M
- ④ a. The son put on his shirt. [英語]  
b. ??Mother put the shirt on her son.  
c. Mother made her son to put on his shirt.
- ⑤ a. Henes son satte på sig skjortan [スウェーデン語]  
Her son put on REFL shirt.DEF  
b. Modern satte på sin son skjortan  
mother.DEF put on her son shirt.DEF  
c. Modern fick sin son att sätta på sig skjortan.  
mother.DEF made her son to put on REFL shirt.DEF

趣旨を超えるものであるので、上記のごく素朴なものにとどめておく。着脱動詞の詳細な意味構造に関しては、影山 (1980), Jackendoff (1990), 松本 (2000) 等を参照されたい。

以下では、(3), (4) の概念構造内の変項 (x, y, z) がどのように指定されているかという点から、語彙化の問題を考えていきたい。ただし、x にあたるものは普通、動作主である人間以外には考えられないので、事実上、移動物である衣服 (= y) とその着点である身体の部位 (= z) が問題になる。議論の関係上、まず先に着点 (= z) から見ていく。

### 3-2. 着点 (= z) の指定 —日本語—

まずは、日本語の「着る」、「履く」そして「かぶる」から見ていこう。これらの動詞は先行研究でも述べられているように、①衣類を目的語として取り、②その着点として特定の身体部位が指定されている動詞である。

#### (4) a. 「着る」…《(「頭部」を除く)上半身》

例) 服, セーター, シャツ, コート, ワンピース, 制服, スーツ, 水着

#### b. 「履く」…《下半身》

例) 靴, 靴下, 下駄, サンダル, ズボン, スカート, パンツ, 足袋, サンダル

#### c. 「かぶる」…《頭部》

例) 帽子, スカーフ, ヘルメット, 覆面, 兜

日本語の着衣動詞が他の言語に比べて際立っているのは、衣服を体のどの部分に移動させるかという点で区別するところにある。「着る」は頭部を除く上半身<sup>4</sup>、「履く」は下半身、「かぶる」は頭部をそれぞれ着点として含んでいる<sup>5</sup>。一方、脱衣の動詞では体のどの部分から衣服を取るかということによる違いはなくなり、動詞「脱ぐ」1語で済まされる。

#### (5) 「脱ぐ」…《身体部位の指定無し》

例) 服, セーター, シャツ, 制服, スーツ, 靴, 靴下, 下駄, サンダル, ズボン, スカート, パンツ, 帽子, スカーフ, ヘルメット

脱衣の動詞では、着衣の動詞に見られる身体部位の指定による区別が中和されてしまう。これには次のようなことが関係しているものと思われる。衣服は着用している時は服としての機能を果たしているのであるが、それを脱いでしまった時にはその機能は果たしていない。つまり、脱

<sup>4</sup> 「着る」という動詞が頭部を除く上半身を着点として含んでいるという記述は日本語教育では有効であると考えられるが、言語学的には考察の余地がある。影山 (1980) は、スーツのような上半身にも下半身にも関わる衣類を取り上げてこの問題を考えている。例えば、スーツのズボンをはいている時に、「\*スーツをはく」とはいえないことから、「着る」は必ずしも胴体に限定されているものではないとしている。詳しくは、影山 (1980) を参照。

<sup>5</sup> ただし、「かぶる」という動詞に関しては、「水をかぶる」、「波をかぶる」、「埃をかぶる」等の表現が存在することを考えると、必ずしも着衣を目的語に取るわけではなく、着衣専用の動詞であるかどうかに関しては再考の余地がある。

衣の動詞において、身体部位の指定が中和してしまうのは、このような着用している時と脱いだ時の服の機能の違いを反映している可能性があると考えられる。

### 3-3. 移動物 (= y) の指定 —日本語・中国語—

ここまでで見てきたように、日本語の着衣動詞は体のどの部分に衣服を移動させるかという点で語彙化されているということがわかった。しかし、表1・2にもあるように、「時計」は上半身に身につけるとしても「着る」という動詞を使うことができないし、「脱ぐ」という動詞も使うことができない。ここで次に考えたいのは、衣類を一律に見るのかそれとも分けて考えるのかという観点である。影山(1980)は「一次的衣類」と「二次的衣類」という区別を提案している<sup>6</sup>。例えばシャツやズボン、スカート、そして靴等はわれわれの生活に欠かせない「一次的な」衣類であると考えられるが、例えばネクタイ、時計、ベルト等は「二次的な」衣類であると考えられる。何が一次的で何が二次的な衣類かということに関する定義は難しい問題であり、まさに文化によって異なってくるものであると思われるので、ここでは厳密な定義はしない。日本語は一次的衣類に関しては3-1.で見たように、体のどの部分に移動するかによって区別される着脱専用の語彙があるが、二次的な衣類に関しては、着脱の動詞以外のものが用いられる。多くは、(6a)–(6e)に見られるように、「つける」・「かける」・「はずす」・「とる」等の対象物の物理的な移動を引き起こすことを意味する動詞、いわゆる「使役移動動詞」かそれに類するものが使われる。さらに、二次的な衣類一般に使うことができる動詞として(6f)の「する」がある。

#### (6) 二次的衣類に使われる動詞

- a. つける / はずす・とる 腕時計, ブローチ, イヤリング, ペンダント, ブラジャー, マスク, イヤホーン
- b. かける / はずす・とる 眼鏡, たすき, エプロン
- c. しめる / はずす・とる ネクタイ, 帯, ベルト, はちまき
- d. はめる / はずす・とる 手袋, 指輪, プレスレット
- e. 巻く / はずす・とる マフラー, スカーフ
- f. する 腕時計, ブローチ, 眼鏡, ネクタイ, 手袋, マフラー...

これらの「使役移動動詞」や動詞「する」は一次的な衣類に使われる「着る」、「履く」、「かぶる」、「脱ぐ」とは次のような点で異なる(影山(1980: 92))。まず、「着る・履く・かぶる・脱ぐ」の目的語が衣類に限られるのに対して、二次的衣類に使われる動詞は目的語が衣類には限られない(「釣針にえさをつける」)。また、「着る・履く・かぶる・脱ぐ」においては着点あるいは起点が身体に限定されるが、二次的衣類に使われる動詞は着点及び起点は身体には限定されない

<sup>6</sup> 影山(1980)では、「主要衣類」と「二次的衣類」という用語を使っているが、本稿では便宜的に「一次的衣類」と「二次的衣類」という用語を用いる。

(「壁に額をかける」, 「壁から額をはずす」). つまり, 一次的な衣類に使われる「着る」, 「履く」, 「かぶる」, 「脱ぐ」という動詞が着脱専用の動詞であるのに対して, 二次的な衣類に用いられる動詞は, 使役移動動詞や動詞「する」を転用して使っているということなる. さて, 衣類が一次的であるか二次的であるかという区別は日本語だけに必要な概念ではない. 次から見る中国語の場合は, まさに一次的な衣類かあるいは二次的な衣類かで, 動詞の選択が決まる.

(7) 「穿」/「脱」...《一次的衣類》

例) 外套(コート), 衬衫(シャツ), 西服(スーツ), 连衣裙(ワンピース), 裤子(ズボン), 裙子(スカート), 鞋(靴), # 子(靴下), 短裤(短パン), 比基尼(ビキニ)

(8) 「戴」/「摘」...《二次的衣類》

例) 帽子(帽子), 口罩(マスク), 防毒面具(防毒マスク), 眼鏡(メガネ), 手表(腕時計), 耳机(イヤホン), 围裙(エプロン), 耳环(イヤリング), 胸针(ブローチ), 手镯(ブレスレット), 项链(ネックレス)

一次的衣類と二次的衣類の分類はおおむね両言語で重なるものと思われるが, 例えば「帽子」は日本語では一次的衣類として扱われ, 「かぶる」が用いられるのに対し, 中国語では二次的なものとしてとらえられ, 「戴」が使われる. しかし, 日本語と中国語の最も大きな違いは, 次の点である. 日本語は一次的な衣類に対して着脱専用の動詞を使い, 二次的な着衣に関しては主に「つける」, 「かける」, 「はずす」, 「とる」等の使役移動動詞や「する」などの動詞を「転用」して用いる. 一方, 中国語ではもう少し, 複雑である. まず着衣の動詞においては, 一次的着衣に使われる「穿」という動詞は, 「穴をあける, (穴に)通す」という意味が原義であり, 着衣専用の動詞ではない. 一方, 二次的着衣に使われる「戴」は着衣専用の動詞であると考えられる. 次に脱衣の動詞に目を向けると, どちらも脱衣専用の動詞ではない. 「脱」は「(髪の毛など)が抜ける, 逃れる」という意味を持ち, 「摘」は「(果物, お茶の芽等)を摘み取る」という意味が原義である. ところで, 衣類を一次的なものとして二次的なものというように区別する言語において, 日本語のように一次的な着衣に専用の動詞を, 二次的な着衣に転用した動詞を使うという語彙化のパターン(表3・B)は非常に自然であると考えられる. また, 中国語の脱衣の動詞のようにどちらにも転用した動詞を用いる言語(表3・C)も自然な語彙化のパターンであると考えられる. 他にも表3・Aのように一次的・二次的どちらの衣類に対しても, 専用の動詞を使うという言語があったとしても不自然ではない. しかし, 中国語の着衣動詞のように, 二次的な着衣に対して専用の動詞が使われ, 一次的な着衣に転用した動詞が使われるというパターンは不自然であると考えられる. なぜこのような語彙化のパターンを示すのかは今のところ不明であり, 今後の課題としたい.

表3 一次的・二次的衣類と着衣専用動詞の分布

	A (?)	B (日本語)	C (中国語・脱衣動詞)	D (中国語・着衣動詞)
一次的衣類	着脱専用動詞	着脱専用動詞	転用	転用
二次的衣類	着脱専用動詞	転用	転用	着脱専用動詞

### 3-4. 英語・スウェーデン語・マラーティー語

英語・スウェーデン語・マラーティー語では、今まで見てきたような、特定の身体部位に関する指定だとか、あるいは、一次的な衣類かそれとも二次的な衣類かといった区別は関係なく、どのような衣類に対しても同じ動詞が使われる。以下に例を示す。(以下、(9)-(12)においてはaが英語、bがスウェーデン語、cがマラーティー語である。スウェーデン語とマラーティー語の衣類の例は英語の例に対応している。)

#### (9) 一次的衣類・上半身

- |                        |  |
|------------------------|--|
| a. put on / take off   | a shirt / a dress / a coat / a sweater   |
| b. sätta på / ta av    | en skjorta / kläder / en rock / en tröja |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | sadraa / Dres / koT / sweTar             |

#### (10) 一次的衣類・下半身

- |                        |                                    |
|------------------------|------------------------------------|
| a. put on / take off   | trousers / socks / a skirt / shoes |
| b. sätta på / ta av    | byxor / strumpor / en kjol / skor  |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | pænT / modze / skarTa / buT        |

#### (11) 一次的衣類・頭部

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| a. put on / take off   | a hat / a helmet   |
| b. sätta på / ta av    | en hatt / en hjälm |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | Topi / helmeT      |

#### (12) 二次的衣類

- |                        |  |
|------------------------|--|
| a. put on / take off   | a wristwatch / glasses / a necklace    |
| b. sätta på / ta av    | en armbandsur / glasögon / en halsband |
| c. ghaal-Ne / kaaDh-Ne | ghaDyaaL / cashmaa / nekles            |

ただし、英語では(13)にみられるように、着衣から他の物への拡張が見られる。拡張(extension)とは、あるカテゴリーを構成するものと類似性は持っているものの、相違点も存在するようなものに対して、その相違点を捨象し同じカテゴリーとして認識すること、つまりカテゴリーを広げていくことである。例えば以下の例では、(13a)のように化粧関係、また(13b)に見られる表情に関するもの、さらには(13c)のように体重のような着衣とは異なるカテゴリーのものが



着衣の動詞と同じ構文に現われている。この拡張を可能にしているのは、衣類・化粧・表情・体重の間にある「身体に付着しているもの」という共通性であると考えられる。

- (13) a. put on            a makeup / a lipstick / eyeliner  
       b. put on            a fake smile / a serious look  
       c. put on            fat / weight

ここで、3. のまとめをしよう。(1)に見られた言語間の相違は次のように説明することができる。まず、日本語と中国語は移動物 (= y) としての衣服が一次的か二次的かという点で動詞の使い分けをする。日本語ではそのような区別に加えて、更に一次的な衣類に使われる動詞において、衣服が体のどの部分に移動するかという着点 (= z) が語彙化されている。一方、英語、スウェーデン語、そしてマラーティー語は日本語や中国語がしているような区別を行っていないと考えられる。

#### 4. 動詞以外の付属要素の有無

次に(2)で取り上げた、動詞以外の付属要素の有無について考察を加えていく。付属要素の有無に関する違いは、単に着脱の動詞に固有の問題というよりはむしろ、言語の類型に関する違いに由来するということを見ていく。

##### 4-1. 「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」

以下では、Talmy (1985, 1991, 2000) で提案されている「動詞枠付け言語」(verb-framed language) と「衛星枠付け言語」(satellite-framed language) という類型論的分類を概観し、それが着脱動詞における動詞以外の付属要素の有無に関して説明力をもつことを示す。Talmy は、自然言語が空間における移動を表す場合、「経路」の概念を何によって具現化するかによって、大きく2つのパターンに分けられることを指摘している。1つは「動詞枠付け言語」であり、もう一方は「衛星枠付け言語」である。前者には、ロマンス諸語、日本語等が含まれ、後者にはゲルマン諸語、中国語等が含まれる。「動詞枠付け言語」における移動表現では、「経路」が(主)動詞として実現する。一方、「衛星枠付け言語」では「経路」が前置詞、小辞等の付随要素 (Talmy はこれらをまとめて satellite (衛星)と呼んでいる)によって具現化される<sup>7</sup>。今回対象としている言語では、英語・スウェーデン語そして中国語が衛星枠付け言語としての特徴を有し、日本語・マラーティー語が動詞枠付け言語であると考えられる。それぞれの言語の移動表現を見てみよう。

<sup>7</sup> 「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という区別はもともと移動表現の分析に用いられたものであったが、最近の Talmy の論文 (Talmy 1991, 2000) ではそれが、移動以外の event においても有効であることが述べられている。

## (14) 衛星枠付け言語

- a. The boy ran into the room. [英語]<sup>8</sup>  
 b. Pojken sprang in i rummet. [スウェーデン語]  
 boy.DEF ran in to rum.DEF  
 c. 少年 跑 进 了 房間. [中国語]  
 boy run into PF room

## (15) 動詞枠付け言語

- a. その少年は走って部屋に入った. [日本語]  
 b. to mulgaa kholit-t dhaaw-at ge-l-aa. [マラーティー語]  
 that boy.M room.F-LOC run-PTCPL go-PF-M

上の例を見てもわかるように、英語、スウェーデン語、中国語では「経路」がそれぞれ、‘into’, ‘in (in)’, ‘序 (into)’ のように主動詞以外の衛星として具現化する。よって、これらの言語は「衛星枠付け言語」であるということになる。一方、日本語とマラーティー語では、「経路」はそれぞれ「入る」と ‘ge-Ne (go)’ というように主動詞として実現する。つまり、「動詞枠付け言語」であるということになる<sup>9</sup>。

## 4-2. 着脱動詞と「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」

さて、3-1.の着脱動詞の意味構造のところでも見たように、着脱という行為は「衣服」を対象物とし、それを着点である「体(の一部)」に移動する使役移動の表現であると分析することができる。つまり、これは4-1.で見た移動表現の一部であると仮定することができる。その証拠として、日本語では、二次的な衣服に関して「つける」、「かける」、「とる」、「はずす」等の使役移動の動詞を着脱の表現に使うことができる。そこで着脱の表現に関しても、Talmy の「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という提案が有効であることは容易に想像がつく。まずは、移動の表現に関して衛星枠付け言語であった英語・スウェーデン語・中国語の例を見てみよう。

(16) a. The boy put on his shirt. [英語]<sup>10</sup>

<sup>8</sup> 英語は基本的に「衛星枠付け言語」であるが、‘enter’, ‘exit’, ‘ascend’, ‘descend’, ‘pass’, ‘cross’ などのように、経路が包入された動詞も多数存在する。(ただし、ほとんどがフランス語からの借用。)つまり、英語は基本的に「衛星枠付け言語」ではあるが、「動詞枠付け言語」としての特徴も持つ。

<sup>9</sup> 今回取り上げた言語の中で、ゲルマン系言語(英語・スウェーデン語)と中国語が「衛星枠付け言語」であり、日本語が「動詞枠付け言語」であるとする分析に関しては、Talmy (1991, 2000) を参照のこと。

<sup>10</sup> ただし、動詞 ‘dress’ では衛星としての小辞は具現化しない。(ちなみに ‘dress’ は動詞枠付け言語であるフランス語からの借用語。)また、着ている状態を表すとき、wear においては小辞は現われないが、have が着衣動詞として使われる際は、現われる。

a. She was wearing a beautiful kimono.

b. She had a beautiful kimono *on*.

<sup>6</sup> において、英語の移動表現が基本的に「衛星枠付け言語」的特徴を有しつつも、「動詞枠付け言語」的なものも許容することを見たが、同じことが着脱の表現に関しても当てはまる。

- b. The boy took off his shirt.
- (17) a. Pojken satte på sig skjortan. [スウェーデン語]  
 boy.DEF put on REFL shirt.DEF  
 b. Pojken tog av sig skjortan.  
 boy.DEF took off REFL shirt.DEF
- (18) a. 少年 穿 上 了 衬衫 [中国語]<sup>11</sup>  
 boy put up PF shirt  
 b. 少年 脱 下 了 衬衫  
 boy take down PF shirt

移動表現で衛星砕付け言語の特徴を示す英語・スウェーデン語・中国語は、着脱の表現においても衛星が現れ、それぞれ ‘on/off’, ‘på/av’, ‘上/下’<sup>12</sup> といったように、着衣と脱衣でそれぞれ違った衛星が用いられている。次に移動表現で動詞砕付け言語の特徴を示した日本語・マラーティー語の例を見てみよう。

- (19) a. 少年はシャツを 着た [日本語]  
 b. 少年はシャツを 脱いだ
- (20) a. tyaa mulaa-ne sharTa ghaat-l-aa [マラーティー語]  
 that boy-ERG shirt.M put-PF-M  
 b. tyaa mulaa-ne sharTa kaaDh-l-aa  
 that boy-ERG shirt.M take-PF-M

移動表現で動詞砕付け言語とみとめられた日本語とマラーティー語は、着脱の表現においても「履く/脱ぐ」, ‘ghaal-Ne/kaaDh-Ne’ のように経路が動詞として実現している。さらに、「動詞砕付け言語」と「衛星砕付け言語」の例を追加しよう。スペイン語は典型的な動詞砕付け言語として度々取り上げられているが、着脱の動詞に関しても衛星は現われずに動詞砕付け言語の特徴を示しているようである。

- (21) a. Me pongo el abrigo. [スペイン語]  
 REFL.1.SG. put the overcoat

<sup>11</sup> ただし、動作が進行中である場合(aの「在」を用いた文)や、結果状態を表す場合(bの「着」を用いた文)は、以下に見るように、衛星(結果補語)は現れない。

- a. 少年 在 穿 衬衫. [進行]  
 boy PROG put shirt  
 「少年はシャツを着ている」  
 b. 少年 穿 着 衬衫. [結果状態]  
 boy put RES shirt  
 「少年はシャツを着ている」

<sup>12</sup> ‘進(in)’, ‘上/下’などの衛星は中国語文法では、結果補語あるいは方向補語と呼ばれている。(詳しくは中川 1996: 122-131 参照.)

「私はオーバーを着る」 (興津 1981:162 逐語訳は本稿筆者による)

- b. Me quito los zapatos.  
REFL.1.SG. take the shoes

「私は靴を脱ぐ」 (興津 1981:162 逐語訳は本稿筆者による)

また、典型的な衛星枠付け言語であるといわれるドイツ語に関しても、着脱表現を見てみると、予測どおり衛星 'an / aus' が現われる。

- (22) a. Die Mutter zieht sich die Schuhe an. [ドイツ語]  
the mother draw REFL the shoes on  
「母親は靴を履く」

(Engel & Schumacher 1978: 127 逐語訳と訳は本稿筆者による)

- b. Die Mutter zieht dem Kind den Pullover aus.  
the mother draw the child the pullover out  
「母親は子供のプルオーバーを脱がしてやる」

(Engel & Schumacher 1978: 135 逐語訳と訳は本稿筆者による)

さて、ここまで例を見てきたように、移動表現と着脱の表現には明らかな平行性が見られた。つまり、移動表現において「経路」が「衛星」として実現する「衛星枠付け言語」においては、着脱の表現においても「衛星」が現れる。また、「経路」が「動詞」として具現化する「動詞枠付け言語」では、着脱の表現においても「動詞以外」の「衛星」的要素が現れることはない。したがって、(2) で取り上げた、動詞以外の要素の有無に関する問題は、「衛星枠付け言語」か「動詞枠付け言語」かという類型論的な言語間の違いが着脱の表現に反映した結果であると言える。

さて、「衛星枠付け」か「動詞枠付け」かといった違いは、「経路」の具現化以外にも重要な違いを引き起こしていると考えられる。以下では典型的な「動詞枠付け言語」である日本語と典型的な「衛星枠付け言語」であるスウェーデン語を比較することで、この点に関してみていくことにする。一般に、衛星枠付け言語では、主動詞以外の部分、つまり「衛星」が文の「枠付け」となるので、主動詞の部分に着脱とは関係のない動詞を用いることができる。例えば、(23) では動詞に靴を脱ぐための「手段」を表すものがきている。一方、動詞枠付け言語では、そのような手段は主動詞部分ではなく、付加的に表現される。

- (23) Han {snörde / sparkade / trampade} av sig skorna.  
he {laced / kicked / stepped} off REFL shoes.DEF

- (24) 彼は {ひもといて / 蹴って / 踏んで} 靴をぬいだ。

このように、スウェーデン語においては着脱の「手段」を主動詞として具現化することは、かなり生産的である。次のような一見すると特殊な表現も、動詞部分が手段を表わしているものと

考えられる。

- (25) Han sprang av sig överflödiga kilon.  
 he ran off REFL surplus kilos  
 「彼は走って余計な体重を落とした」

不可分離所有の関係が体の部分から衣服へと拡張することはよく報告されている。(25)では「衣服 ⇒ 体重」, 「脱ぐこと ⇒ 減らすこと」という対応関係が成立し, 主動詞として体重を減らす「手段」である‘springa’「走る」という動詞が来ることで, (25)の文が解釈可能になっていると考えられる。

また, 主動詞がほとんど元の意味を失っているようなものもある。例えば次の例では‘kasta」という動詞はすでに「投げる」というもとの意味をほとんど失っている。これも文の「粹付け」が「衛星」にあり, 衛星を中心として構文が形成されているため, 動詞部分にほとんど意味を持たないものを用いることができるものと考えられる。

- (26) Han kastade {på / av} sig skjortan.  
 he threw {on / off} REFL shirt.DEF  
 「彼は急いでシャツを着た / 脱いだ」

さらに, 次に見るように命令文では動詞を用いずに衛星だけで文を形成することもできる。これも衛星が中心となっていることを示しているものと思われる。

- (27) Av med skorna!  
 off with shoes.DEF  
 「靴を脱ぎなさい」
- (28) På med kläderna kvickt!  
 on with clothes.DEF quickly  
 「急いで服を着なさい」

以上ここまで見てきたように, 衛星粹付け言語においては, 「経路」が衛星として具現化し, 衛星が文の「粹付け」として働く。したがって, (23), (25)で見たように「着脱」をもともと意味しない動詞が主動詞として現われる。また, 衛星を中心として構文を形成し, それ自体が意味を持つので (26)のように, ほとんど意味的な要素が削ぎ落とされた動詞が主動詞の位置を埋めることができたり, (27), (28)のようにそもそも動詞さえ用いられないような構文も可能になるものと考えられる。

## 5. ま と め

着脱の動詞に関する言語間にみられる相違点と共通点は, 単なる偶然の一致ではなく, 以下に

表4 着脱動詞に関するまとめ

	動詞枠付け言語	衛星枠付け言語
一次的・二次的 衣類の区別あり	日本語 (着点による語彙化)	中国語
一次的・二次的 衣類の区別なし	マラーティー語	英語 スウェーデン語

纏められているように、体系的なものであるということがわかった。

(29) 日本語と中国語では、衣類を我々の生活にとって必要な「一次的衣類」と、「二次的衣類」とに分け、それぞれにおいて動詞の使い分けをする。日本語ではこのような区別に加えて、一次的な衣類に使われる動詞において、衣服をどの「身体部分」に着けるかで更なる区別を行っている。一方、英語・スウェーデン語・マラーティー語ではそのような区別に無関心である。

(30) 移動の表現において提案されている「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」という言語類型的区別が、着脱の表現においても反映し、動詞枠付け言語である日本語とマラーティー語は動詞のみを使用する(例えば「着る」)。一方、衛星枠付け言語である英語・スウェーデン語・中国語では動詞以外の要素が必要となる(例えば put on)。

#### 略号一覧

DEF: DEFINITE, ERG: ERGATIVE CASE, F: FEMININ, M: MASCULIN, PF: PERFECT, PROG: PROGRESSIVE, REFL: REFLEXIVE PRONOUN, RES: RESULTATIVE, SG: SINGULAR.

#### 謝辞

本研究は、執筆者のうち當野が受けた「2002年度スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団助成金」による研究成果が含まれている。また、英語とスウェーデン語のデータは當野、中国語のデータは呂が検討したが、マラーティー語のデータに関しては Prashant Pardeshi さんにご協力いただいた。Prashant さんにはマラーティー語のインフォーマントとしてだけでなく、議論の過程において常に様々な助言を戴いた。また、神戸大学大学院の真野美穂さんと澤田浩子さんには、草稿を読んでいただき、貴重なコメントを頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。もちろん、本稿における誤り等は筆者がすべて負うものである。

#### 参考文献

- Engel, Ulrich, and Helmut Schumacher. 1978. *Kleines Valenzlexikon deutscher Verben*. Tübingen: TBL Verlag Gunter Narr.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McCawley, James D. 1978. "Notes on Japanese clothing verbs." In Hinds, John, and Irwin Howard ed., *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 68–78. Tokyo: Kaitakusha.
- Shibatani, Masayoshi. 1976. The Grammar of Causative Construction: A conspectus. In Masayoshi

- Shibatani, ed., *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi, and Prashant Pardeshi. 2002. "Causative continuum." In Shibatani ed., *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, — Amsterdam: John Benjamins.
- Talmy, Leonard. 1985. "Lexicalization Patterns: Semantic in Lexical Forms." In Tim Shopen, ed., *Language Typology and Syntactic Description III: Grammatical Categories and the Lexicon*, 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1991. "Path to Realization: A Typology of Event Conflation", *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 480–519. Berkeley: Linguistic Society, University of California, Berkeley.
- . 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』, 松柏社.
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(上)』, 岩波書店.
- 松本 曜 (2000) 「日本語における他動詞 / 二重他動詞ペアと日英語の使役交替」丸田忠雄・須賀一好(編) 『日英語の自他の交替』 167–207, ひつじ書房.
- 中川正之 (1996) 『はじめての人の中国語』, くろしお出版.
- 興津憲作 (1981) 『英語活用 スペイン語入門』, 白水社.
- 彭 飛 (1990) 『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』, 和泉書院.